令和３年度学校経営計画に対する中間評価報告書

石川県立七尾高等学校

１　豊かな人間性と国際性の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・学校行事、生徒会活動や部活動等あらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。	・生徒一人ひとりが一日一善の精神で、他者に対して小さなボランティアを行う。 ・各部ボランティア活動「校内」「地域貢献」（随時）	【成果指標】 （生徒） 一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを実感できる。	一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 ８０％以上 Ａ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】多くの生徒が、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったと答えており、一日一善運動が定着しているといえる。世間ではコロナ禍による閉塞感が見られるが、新しい生活様式の中であっても人とのつながりを大切にしようとする心情を育みたい。 【今後の対応】一日一善運動を継続的に行い、今以上に浸透させたい。
・異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローバル、ローカルそれぞれの視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。	・「能登の里山里海」特別講座（１年） ・ふるさとに学ぶクリエイティブ人材育成事業（２年）	【成果指標】 （生徒） 「ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている」と評価した生徒の割合が高まっている。	４月に比べると、ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８０％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 ７０％未満 Ｄ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】総合的な探究の時間で地域創造や異文化について学ぶ機会があるが、ふるさとへの誇りや愛着を実感できた生徒の数は十分とは言えない。 【改善策】総合的な探究の時間に加えて、十分にコロナウィルス感染防止対策を講じたうえで以下の取組を実施する。 ・１年生「能登の里山里海特別講座」（１１月） ・２年生「ふるさとに学ぶクリエイティブ人材育成事業に係る講演会」（９月・１１月）
	・異文化交流 ・外務省高校生講座	【成果指標】 （生徒） 「異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が湧いた」と評価した生徒の割合が高まっている。	４月に比べると、異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 ７０％以上 Ｂ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】コミュニケーション英語等で ALT よる異文化理解学習が効果的であり、それ以外の取組が行われていない中、生徒からの回答は７３．５％であった。 【今後の対応】１１月に実施予定の外務省高校生講座でさらに異文化を理解する意欲を高める。

学校関係者評価委員の評価	・高校生が地域社会と触れる機会がコロナ禍により減っている。感染症対策を講じたうえでインターンシップなどを行い、地域社会や地元企業に対する理解を深めてもらいたい。
評価結果を踏まえた今後の改善方策	・次年度に向けて、コロナ禍においても地域社会や地元企業とかかわって生徒の理解を促せる取組方法を考える。

２　進路志望実現のための学力の形成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・基礎学力の定着を着実に進めるとともに、探究型学習を推進して困難な課題と向き合い考え抜く、粘り強い思考力を育成する。 ・生徒の可能性を最大限に引き出し、大学入試制度の変化にも対応できる進路指導を実践する。	・志を貫くためのキャリア教育 ・キャリア教育講演会 ・全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底 ・学習時間調査 ・ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談 ・進路情報の発信 ・進路講演会 ・難関大学入試問題解法研究 ・金沢大学入試問題解法研究 ・習熟度別学習指導（週末課題） ・スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導 ・金沢大学キャンパスビジット等 ・京大サマースクール ・金沢大学による出張講座 ・保護者への進路説明会 ・学習計画の作成とチェック ・志望校群別検討会（２年） ・志望理由書の作成（１・２年） ・批判的思考力育成（３年） ・放課後の学習会 ・出願校検討会（３年）	【成果指標】 （生徒学年別） 第１志望に対して明確な理由がある。	高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して Ａ　１００％以上 Ｂ　　８０％以上 Ｃ　　８０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜生徒：１年生＞ ８０％以上　Ｂ ＜生徒：２年生＞ ８０％以上　Ｂ ＜生徒：３年生＞ ８０％以上　Ｂ	【判断基準】各学年目標 １年１００（５割） ２年１４０（７割） ３年１９０（８割） Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】現２、３年生は昨年度の前回調査の人数とほぼ同数である。キャリア発達のためには適切な情報提供や目標設定とともに、生徒自身の肯定的な自己理解と、そのための支援が必要である。 【今後の対応】３年生には目前に迫った進路選択を将来設計に繋げられるように支援し、１、２年生には外部の教材を活用した学問探究等を進める。また、キャリア教育講演会や各種セミナーを通して、社会と自身の関係性を考えさせたり、自分の可能性を肯定的に捉える自己理解を促す支援を計画的に行う。
		【成果指標】 （１年生生徒） 学習習慣を身につけ、成績を伸ばしている。	（進研模試７月と１月の３教科総合偏差値の比較） 入学後、学力を伸ばした生徒が Ａ　１６０人以上 Ｂ　１３０人以上 Ｃ　１３０人未満	【４月スタディーサポートから７月進研模試で３教科総合偏差値を伸ばした生徒】 ＜生徒：１年生＞ １６０人以上 Ａ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。 Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】４月との比較では、多くの生徒が学力を伸ばしているといえるが、多くの生徒が学習習慣の定着に課題がある。 【今後の対応】基礎基本の定着を軸にしながら、家庭学習等の負荷を学力層に応じて調整するなどの対策を施す。また、個人面談や学年集会を通じて、中上位層、特にＡ２・Ａ１層の学習時間と学習モチベーションの伸長を図る。
		【成果指標】 （１年生生徒） 着実な学力形成を果たしている。 （進研模試１月）	１月進研模試での学力到達度（ＧＴＺ）のＳランクの生徒が Ａ　　３５人以上 Ｂ　　２５人以上 Ｃ　　２５人未満	【７月進研模試３教科総合での学力到達度（ＧＴＺ）】 ＜生徒：１年生＞ ２５人未満 Ｃ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。 Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】４月スタディーサポートと大きな変化はなく、上位層でも学習習慣が定着できていない生徒が多いことが課題である。 【改善策】個々の生徒を把握し、授業での指名や声かけ等を通じて予習や課題において能動的に学習する意識を涵養するとともに、授業、課題等で学習に対するモチベーションを喚起し、家庭学習時間の伸長、学力向上を図る。
		【成果指標】 （２年生生徒） 着実に学力を伸ばしている。 （進研模試７月と１月の３教科総合偏差値の比較）	２年次に、学力を伸ばした生徒が Ａ　１６０人以上 Ｂ　１３０人以上 Ｃ　１３０人未満	【７月進研模試３教科総合での学力到達度（ＧＴＺ）】 ＜生徒：２年生＞ １年１月進研模試から２年７月進研模試で学力を伸ばした生徒が １３０人未満 Ｃ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。 Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】学習時間の不足と学習習慣の未定着が多くの生徒に見られ、そのことが全体的な底上げができていない要因である。 【改善策】 ・授業改善を進めるとともに、予習チェックを行うなど、予習復習を徹底させる指導を行う。 ・生徒が学習を中心とした生活習慣を構築できるよう、担任が Classi を活用して生徒の生活指導を徹底する。

		【成果指標】 （２年生生徒） 着実に学力を伸ばしている。 （進研模試１月）	１月進研模試３教科総合で学力到達度（ＧＴＺ）のＳランクの生徒が Ａ　３５人以上 Ｂ　２５人以上 Ｃ　２５人未満	【７月進研模試３教科総合での学力到達度（ＧＴＺ）】 ＜生徒：２年生＞ ２５人未満 Ｂ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。 Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】１年１月と比べて、上位層に大きな変化は見られないものの、上位層の学習時間を増加させられていないことが課題である。 【今後の対応】 ・習熟度別の週末課題の継続や課題の課し方の工夫を行うとともに、上位層への個別指導を行う。 ・志を高く持たせるよう、Ｓランクの生徒への指導を継続するとともに、Ａランクの生徒においても、個人面談を通してＳ難関や難関大学を目指させる助言等を行う。
		【成果指標】 （２年生生徒） 着実に学力を伸ばしている。 （進研模試１月）	１月進研模試での５教科総合偏差値で６０以上の生徒が Ａ　８０人以上 Ｂ　６０人以上 Ｃ　６０人未満	【７月進研模試３教科総合偏差値】 ＜生徒：２年生＞ ８０人以上 Ａ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。 Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】上位層は多いものの、学習習慣が未定着の生徒が多く、そのことが懸念材料である。 【今後の対応】 ・習熟度別指導の改善を行い、授業での説明等や課題の量と質を、適切な負荷となるよう差異化を図る。 ・各教科で学習到達度を図るための小テストや問題演習、および予習復習のチェックのあり方を見直す。 ・教員の教科指導力と進路指導力の向上を図るため、担任会議や教科会議を活用する。
		【成果指標】 （３年生生徒） 個々の志望大学の結果による。 ＊スーパー難関大学とは、東大・京大・国公立大医学科を指す。	スーパー難関大学の合格者が Ａ　５人以上 Ｂ　３人以上 Ｃ　３人未満 難関大学１０大学の合格者数が Ａ　２５人以上 Ｂ　２０人以上 Ｃ　２０人未満 金沢大学の合格者数が Ａ　４０人以上 Ｂ　３０人以上 Ｃ　３０人未満 国公立大学の合格者数が Ａ　１６０人以上 Ｂ　１４０人以上 Ｃ　１４０人未満	【７月進研模試５教科総合での学力到達度（ＧＴＺ）】 ＜生徒：３年生＞ スーパー難関大学 Ａ 難関 10 大学　Ａ 金沢大学　Ａ 国公立大学　Ａ	【判定基準】大学入試結果で判定する。Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】7 月進研模試の結果（GTZ） ・スーパー難関大合格可能性のある生徒　…A ・難関 10 大学合格可能性のある生徒　…A ・金沢大学合格可能性のある生徒　…A ・国公立大学合格可能性のある生徒　…A 上位層は育ってきているものの、全体的に志望校のレベルには達していない。学習時間を十分とれていないことが要因である。 【今後の対応】 ・授業や教科面談を通して個に応じた学習方法や具体的に取り組むべき課題を確認し、着実に学力を伸ばす。 ・GTZ の S 層と A 層の生徒については２次試験で配点が高い教科科目でしっかりと得点ができるよう２次試験を意識させ、学習に取り組ませる。B 層や C 層の生徒については共通テストでしっかりと得点できるよう共通テストを意識させ、学習に取り組ませる。
学校関係者評価委員の評価		・進学のためだけではない「学ぶ意味」を生徒に考えさせるとともに、人間力を高める指導に力を入れてもらいたい。 ・コロナ禍によって、生徒の進路希望が制限を受けることのないよう配慮や指導をしてもらいたい。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		・学校教育の様々な場面で本質を捉えた指導を行うとともに、教員が生徒と一緒に考えたり、悩んだりする時間を大切にしたい。 ・感染症予防を習慣化、効率化することで、安心安全な環境を整えるとともに、継続的に情報収集に努める。			

３　教員の総合的な指導力の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・生徒理解に努め、共感力と生徒支援力の向上を図るとともに、人間としての在り方・生き方を育む指導力を高める。 ・教職の専門性を基礎とし、教科指導力や学級経営力、危機管理力などの実践的な指導力の向上に努める。 ・校内でのＯＪＴによる若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。 ・GIGA スクール構想の実現に向けて、教員の ICT 活用指	・スマートフォン、携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策ための資料の作成と配付 ・生徒会によるネットトラブル防止啓発活動の企画・実施	【成果指標】 （生徒） スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。	スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」・「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が Ａ　９５％以上 Ｂ　９０％以上 Ｃ　８５％以上 Ｄ　８５％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜生徒＞ ９０％以上 Ｂ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】昨年度同時期に比べ、５．１ポイントの減少となった。これは昨年度行っていたネットトラブル防止啓発資料の配付や活用が今年度滞っていることと、そのために生徒自身の危機意識が薄れていることが背景にある。ＳＮＳでのトラブルは誰にでも起きうるものであるとの認識のもと、改めて啓発指導を再開する必要がある。 【今後の対応】新しい生活様式が浸透していく中で、LINE や Instagram 等の従来の SNS の注意喚起にとどまらず、Zoom やテレビ会議等のマナーやトラブルについても指導していきたい。
	・「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進 ・学習到達度に応じた予習・復習の取り組み方法の提示 ・Ｃｌａｓｓｉを活用した予習内容の可視化 ・予習チェックの呼びかけ ・「効果的な予習を促す」指導及び「多様な見方考え方が身につく」指導に関する教科内及び教科間での研究と情報共有 ・批判的思考力育成課題「知のよりみち」の更なる活用を図るために編集を工夫	【成果指標】 （生徒） 国語・数学・英語において「私は予習をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が高まっている。	国語・数学・英語における「私は予習をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が Ａ　７０％以上 Ｂ　６５％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	【７月実施第１回生徒による授業評価】 ６０％未満 Ｄ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】６０％を超えた教科は、英語のみであった。教員対象の学校評価アンケートにおいて、予習の確認を週１回以上行っている教員は６３．３％にとどまっており、粘り強い指導が必要である。 【改善策】次の授業の予習内容を明確に提示し、予習の必然性を感じさせる授業改善を行う。これを継続的に行うことを、教科主任を通して徹底し、各教科会で情報共有を行う。
		【成果指標】 （生徒） 「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が高まっている。	「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が Ａ　６５％以上 Ｂ　６０％以上 Ｃ　５５％以上 Ｄ　５５％未満	【７月実施第１回生徒による授業評価】 ５５％未満 Ｄ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】昨年度と比較し、０．８ポイント減であった。教員対象の学校評価アンケートにおいても、思考力を高める課題を毎時間もしくは週ごと出している教員は５５．１％にとどまっており、改善が求められる。 【改善策】授業の中で多様な考えにふれる場面を増やし、生徒に理解させる授業改善を、教科主任を通して促す。
	・学年・教科を主体としたＯＪＴによる若手教員育成を推進する。	【成果指標】 （若手教員） ＯＪＴをとおして教員としての成長を実感できる。	ＯＪＴにより「教員としての成長を実感できた」・「ややできた」と答えた若手教員の割合が、 Ａ　１００％ Ｂ　９５％以上 Ｃ　９０％以上 Ｄ　９０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ ９０％未満 Ｄ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】アンケート結果からは、教員としての成長を実感できていない若手教員が多いことがわかる。その原因や理由については、教科や分掌などの個人的な差異が大きいと思われるため、主任層を中心として聞き取りを行うとともに、多面的に改善策を考えていく必要がある。 【改善策】若手教員が達成感を感じられるよう主任層が声かけや観察を継続的に行うとともに、若手を対象としたアンケートを実施して、若手教員が抱える不満や不安をすくい上げていく。

導力を高めることによって生徒の学びの変容を促す。	学校を挙げてGIGAスクール構想を推進する。	【成果指標】 （教員） ICTを活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している。	アンケートで、「ICTを活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している」に、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた教員の割合が、 A　７０％以上 B　６０％以上 C　５０％以上 D　５０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ ７０％以上 A	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】日常的にICT機器を活用した授業が見られる一方で、教科や科目によってはその頻度や活用方法に差が見られ、生徒が一人一台のChromeBookを使いこなしている授業はまだわずかである。 【今後の対応】先駆的な取組の事例を教科や学年で共有するとともに、さらに生徒自身がＩＣＴ機器（ChromeBookやiPad等）を活用する場面を授業で増やすよう授業改善を促す。
学校関係者評価委員の評価	・生徒が一人一台の端末を効果的に使えるよう、Wi-Fiなどの利用環境も整えてもらいたい。 ・単にICT機器を活用するだけでなく、生徒自身が学習動画を作成するなど、より効果的な活用方法を考えてもらいたい。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	・石川県教育委員会と相談しながら、環境整備を図りたい。 ・いただいたアイディアを前向きに検討するとともに、さらに地域や保護者の意見を聞きながら、よい方向を考えていきたい。				

4　魅力ある学校づくり

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・特色ある教育活動（第4期SSH事業、NSH事業）を全校的に推進し、その成果の全国的な普及に努める。また、その活動・成果を地域の小中学生に広報し、本校の魅力として伝える。	学校設定教科「探究」の成果物等の他校への普及	【成果指標】 本校の開発した教材を提供し、県内外の他校（中学校を含む）に成果の普及を図っている。	本校の開発教材を使用した学校数が A　２０校以上 B　１５校以上 C　１０校以上 D　１０校未満	【成果指標】 １０校未満 D	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】本校の開発教材（段階的スーブリック、ユニット制）を提供した、または使用している学校は８校（８月末現在）である。その他、地域の自然観察会で教材が利用された（薬草データベース）。 【改善策】今後リニューアルしたホームページに掲載・ダウンロードできるよう整備し、さらに普及を図っていく。
	物理チャレンジ、化学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの出場者の育成	【成果指標】 （生徒） 全国大会相当への出場の決定数が増えている。	全国大会相当への出場が決定した個人またはグループ数が A　４以上 B　３ C　２ D　１以下	【成果指標】 ＜生徒＞ ４以上 A	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】「すべらない砂甲子園」に2グループが出場し、高校生バイオサミット計画部門で2件が決勝進出した。 【今後の対応】今後、科学系論文のコンテストへの応募、発表会への応募により、件数を増やすことを目指す。なお全国総文出場にかかる各種研究発表会は、12月に行われる。
	・英語に関するコンテスト（スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など）、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の促進	【成果指標】 （生徒） 左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。	左記大会やコンテストに参加し A　優勝を含む入賞６件以上 B　入賞　５件 C　入賞　４件 D　入賞　３件以下	【成果指標】 ＜生徒＞ 入賞　３件以下 D	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】８月末段階では１件の入賞（郷土研究部）がある。 【改善策】大会やコンテストが行われる秋以降の入賞をめざして、指導を継続する。

	・複数年を見通した指導の構築				
	文系フロンティアコースに所属する生徒の実用英語技能検定２級以上における取得率の増加	【成果指標】 （生徒） 左記の検定合格者数が増加している。	左記検定における合格者数が Ａ　４０人以上 Ｂ　３６人以上 Ｃ　３４人以上 Ｄ　３３人以下	【成果指標】 ＜生徒＞	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 ２月に実施される令和３年度第３回英語検定の合否結果で評価する。
学校関係者評価委員の評価	・コロナ禍によってＳＳＨやＮＳＨの海外研修が軒並み中止になっており、それに代わる効果的なコンテンツや体験学習を実施してもらいたい。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	・現在行っているオンラインによる海外の高校生との交流や国内の外国人留学生との活動をさらに充実させ、コロナ禍においても海外研修と同等の教育効果を得られるよう工夫する。				

５　働き方改革の推進

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・教職員は、ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながら不断に業務改善を進め、教育活動の質的向上に努める。	・月２回の定時退校日と８月の閉校日を設ける。 ・最終退校時刻を意識して計画的に業務に取り組む。 ・長期休業中にまとまった休暇を取得する。 ・年休を計画的に取得する。 ・会議のペーパーレス化をさらに進めるとともに、効率的・効果的な会議運営を行う。 ・情報共有の仕方を工夫し、職員朝礼を原則として週に１回とする。 ・業務の平準化を図り、分業と協業の体制をつくる。 ・部活動の休養日を適切にとる。	【成果指標】 （教員） 業務の工夫・改善により効率化を図る。	業務の工夫・改善により効率化を「図ることができた」・「やや図ることができた」と答えた教員の割合が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ ７０％以上 Ｃ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】昨年同時期のアンケート結果と比べて、７ポイントの低下となっている。超過勤務時間も昨年と比べ大きな変化は見られない。個人レベルの業務改善だけでは、業務の効率化は難しい現状が窺える。 【改善策】慣例的に作成してきた書類や恒例の学校行事、会議などを抜本的に精選する必要がある。来年度の計画を策定する際に検討する。
学校関係者評価委員の評価	・これまでの業務効率化の取組を高く評価するとともに、さらに工夫改善を図ってもらいたい。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	・Classi など民間事業者のサービスやコンテンツをうまく活用することで、さらなる業務効率化を進めたい。				